

# FD ニュースレター

Health Sciences University of Hokkaido

北海道医療大学FD委員会

FD News Letter No. 3



## ■FD合宿実施特集

### 泊まり込みFD

平成14年11月16日・17日、北海道医療大学全体としては最初の泊まり込みFDがないえ温泉を会場におこなわれ、参加者には学部をこえた一体感がうまれた。

FD委員会の懸案であった合宿型FDが、本学でもついに実現された。参加者は廣重学長はじめ、各学部から10名ほど教員、計41名と事務2名であった。

参加者は、17日朝、あいの里キャンパスと当別キャンパスからバスに乗車。あいの里キャンパスでは、廣重学長、松田歯学部長の姿もみえて、半数以上が乗車、8時45分出発となった。折しも初雪の朝となり、バスは当別キャンパスに20分遅れで到着、そこで残りの参加者をのせ、さっそく川上さん司会で自己紹介となった。

参加者は、肩書きをこえた自由な意見交換ができるようにすべて「さん」付けで呼ぶことになった。「廣重さん、ではお願いします」・・・参加の動機、期待などを交えた自己紹介では、学部長の指名な

でというような消極的参加が多いことがわかったが、積極的参加もかなりみられた。

会場のある奈井江に近づくにつれ、雪景色美しく、だがバスはゆっくりとなり、結局45分遅れの到着となった。まず「ないえ温泉北の湯」の玄関で、アライブとなる記念写真を撮影、先着の事務が設定していた研修室で、早速研修にはいった。研修は、ディレクター、タスクフォース以外の参加者が5グループにわかれ、2日間で5つのワークショップをこなす形であった。プロデューサー廣重 力学長、ディレクター阿部和厚、タスクフォース黒澤隆夫、和田啓爾、有末 眞、川上智史、鈴木幸雄、土肥聡明、事務・飛岡範至、笠原晴生が世話役であった。研修は、グループ員がうちとけるためのゲーム、グループ

にニックネームをつけることから始まった。

ワークショップ（WS）は、1日目が、WS1「北海道医療大学をめぐるニーズ」、WS2「科目名と目標の設定」、WS3「方略 授業設計」、2日目にWS4「評価」、WS5「北海道医療大学を卒業したというアイデンティティをもたせる授業ー柔軟なカリキュラム改革体制」と5つに別れ、それぞれタスクフォースによるミニレクチャーや作業



内容の説明があり、約1時間程度のグループ作業をし、その結果を全体に発表、討論することをくりかえした。

ワークショップという形式は、特定のメンバーが集まって研修し、形のある成果を出すもので、芸術家や職人グループが泊まり込んで研修して売り物になるものを生み出す、店を開けるものを作ることがショップという由来である。この研修でも、本校で使える授業科目を各グループで設計、提案することを目標とした。

45分の遅れは、午後には取り返し、夕方にはリラックスタイムとして温泉につかる時間も用意された。夕食はいわゆる温泉の食事をお酒なし、食後も授業設計のワークショップがなされ、夜の8時半から、持ち寄りの飲み物、おつまみのほろ酔い懇談会となった。懇談会には「学生による授業評価は個人情報である。肯定、否定」のディベートが用意されていたが、始まってすぐの盛り上がりで、省略され

た。中締めのアとも多く教員が話しをつづけ、数名は午前様となった。

17日は朝8時30分からワークショップが再開され、科目設計がひととおおり終わって各グループの科目提案が完結したところで、この大学あの個性を發揮できる科目を企画する最後のワークショップとなった。各グループは昼食の時間も惜しんでそれぞれユニークな授業を企画し、午後の発表となった。

研修は午後の3時に終了し、帰途のバスでの各自の感想では、疲れたが得るところが多かった、学部を超えて共同作業をしたのがよかったという発言が多数であった。

後日談として、FD打ち上げの会が打ち上げの会が持ち上がり、12月16日に参加者の半数ほど集まって、北海道医療大学の学部をこえて、教育を語る会となった。共同体意識が本校の教育を大きく前進させる力となることが期待された。



初日 午後8時20分 ほろよい懇談会直前のグループワーク

## ワークショップの評価 (一部を紹介) (全体は報告書に)

今回のワークショップを、全般的に評価してください。

(1) 内容の価値についてどう評価しますか。

価値なし(0.0%) 価値少ない(2.9%) いくらか価値あり(22.9%) かなり価値あり(42.9%) きわめて価値あり(31.4%)

(2) 内容に対する時間量はいかがでしたか。

- 多すぎ(5.7%) やや多い(20.0%) ほぼ適当(20.0%) やや少ない(40.0%) 少なすぎ(14.3%)
- (3) 内容の難易をどう感じましたか。  
 きわめて難しい(5.7%) やや難しい(28.6%) ほぼ適当(57.1%) 少し易しい(0.0%) 易しすぎ(2.9%)
- (4) このようなワークショップ形式の教育方法としての効果についてどう思いましたか。  
 効果なし(0.0%) 効果少ない(5.7%) ある程度効果的(45.7%) かなり効果的(28.6%) きわめて効果的(17.1%)
- (5) このワークショップの内容はあなたの興味に対して適切でしたか。  
 全く不適切(0.0%) やや不適切(20.0%) ある程度適切(31.4%) かなり適切(31.4%) きわめて適切(17.1%)
- このワークショップで示されたような教育学的方法を今後取り入れようと思いませんか？  
 全く取り入れる気はない(2.9%) 余り取り入れようとは思わない(5.7%) 少し取り入れたい(31.4%)  
 かなり取り入れたい(34.3%) 大いに取り入れたい(22.9%)
- 上において(3)～(5)に○をつけた方は、現時点であなたの教育の現場で実現の見通しは？  
 きわめて難しい0.0% かなり難しい(5.7%) ある部分では可能(34.3%) かなり可能(34.4%) 全面的に可能(8.6%)
- 今後ともこういうワークショップを持つことに対して  
 反対(0.0%) とくに持たなくてもよい(14.3%) 持ってもよい(22.9%) 持つ方が(22.9%) 是非持つべきである(5.7%)

意見：良かった点：他学部の教員との交流、分野をこえての交流できたことがよい：60%以上

共同作業できた、楽しかった、科目設計がわかった、ポートフォリオを知った、医療大学を考えた・・・

改善すべき点：作業時間がたりなかった：約25%

過密、もりだくさん、夕食後の作業、指名の参加・・・

## 発想のしなやかさと団体力・コミュニケーション能力 の大切さ 第1回FD合宿研修会感想記

心理学部言語聴覚療法学科 森寿子

1ヶ月前までは、晩秋の風景であった学園都市線は一気に冬になり、小雪が舞う中を研修先である奈井江町へと向かった。半信半疑。興味津々。其処までは可愛いものだったが、それから先はFD委員長である阿部教授とタスクフォースの先生方の手の中で、きっちりし切れ、しごかれた。クールでスマート。見事なお手並みであった。お陰で2日目の帰路のバスの中では、みんなヘトヘト。ものを言う元気も無かった。あれから数日が経ち、確かにハードであったが、何故か爽やかで、貴重な体験をさせて貰ったという思いが強く、企画実行された先生方に感謝したい。

### 1 異文化経験：発想のしなやかさを大切に

今回の合宿研修は、北海道医療大学創立以来初めての試みであったとのこと。5グループに分かれて、与えられたテーマについて、授業設計をした。ルールは、一切の肩書きなし・お互いを「..さん」付けで呼び自由に意見を言う事であった。私のグループには広重学長が入られた。学長は風のように飄々と座られ、我々の意見に耳を傾け、決して威張ることなく、大切な所ではきっちり発言されてグループの一

員になりきられた。この在りようも実に見事で、敬服の極みであった。前任校では、学長は雲の上の人。自由に意見など言える存在ではなく、学長に向かって意見を言う事自体が許されもしなかった。そのうえ、高度専門医療を標榜する大学病院であったから、メディカルとコメディカルのどうしようもない溝と段差。その中で34年間、言葉使いに心を砕き、相手の顔色を見ながらものをいってきた人間にとっては、まさに「異文化経験」であった。「教育にも学問にも、発想の自由としなやかさがいる。多様な視点から、自分の言葉で理論を構築せずして専門性など無い。その大切さに気づきなさいよ」。阿部委員長の無言の声が聞こえるようだった。



2 団体力とコミュニケーション能力の大切さ限られた時間内でワークショップを5つもこなし、纏めて発表するという訓練を2日間体験した事で、団体力とコミュニケーション能力の大切さを改めて実感した。異なる立場の人間の持つ発想のユニークさと

馬鹿力。それは不可能を可能にする勢いを持っていた。我々のグループは最後には「特色ある教育研究」のテーマにまで迫ったのである。私が所属する心理コミュニケーション能力を発揮すれば、凄い事が出来るのではないかと密かに思えてきた。遠い道ではあるが、凍てつく冬があるから札幌の5月の花が美し

科学部言語聴覚療法学科は、学問としてはスタートラインに立ったばかりだが、団体力と優れたコミ

い事を信じて、辛さがあれば実りの時も、失敗があれば成功も、人生にも学問の道にも色々な側面があることを信じて、頑張りたいと思う。

## 熱いところと冷たい頭

まずは、膨大な資料と十分に計算された研修の進行ぶりに感心した。私としては、実際には二つのグループの作業に参加してみて、とても啓蒙的であったと思う。最後の締めの挨拶で、私はあるアンケートで学生が望む授業の3要素として、教師の人間性と専門性がミックスしていること、教師の熱意・情熱が伝わること、出席して初めて味わえることの3つが挙がっていたことを紹介した。しかし、帰路の車の中で、なにかが欠けていることに気づいた。これらの3要素は研修中に出た言葉を用いると「熱いところ」に近い。このほかに「冷たい頭」が要するというのである。このことは合宿研修に行われた授業設計の作業の苦勞に見事に示されていた。私はこの4月から、新入生全員を対象に「個体差健康科学」の授業を始めたが、新しいテー

## 平成14年度FD合宿研修 感想

学長 廣重 力

マのため見本もなく、「熱いところ」だけで何とかクリアしてきた。来年は「冷たい頭」を加えて、内容を改善するのが楽しみである。



## FD 合宿研修

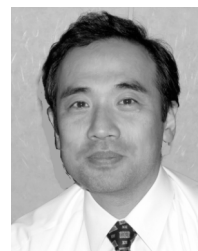
歯学部口腔衛生学講座 千葉逸朗

初めてFD合宿研修なるものに参加しました。今回研修を終わっての印象は、「人間その気になれば結構できるものだ。」ということでした。

行きのバスの中では拉致だの洗脳などと仰っていた方々も大勢いらっしゃいましたが、拉致された側と拉致された側、拉致された者同志がだんだん仲良く、打ち解けて、結果を次々と出して行く様子を目の当たりにしました（こういうのってストックホルム症候群とはいわないのでしょうかね）。おそらく、プログラムがそのように組まれていて、我々はただそれに乗せられてやっていただけということもあったでしょう。また、どなたかがおっしゃっていたように「いいタイミングで終了した」ということもあったでしょうが、何か大きな可能性を見たような気がしました。古新聞の利用方法から始まり、ワークショップを進めるにつれて、各メンバーからどんどんアイデアが湧き出て来るようになり、そのスピードについていっただけで大変でした。特に例の小さな紙にアイデアを書いてまわしていくという作業には「参りました！」という感じでした。

さて、このFD研修で得た知識、技術を、いくつかでも自分の講義に還元できると思います。近いうちにPBLを試してみようと考えています。研修を受ける前までは少し安易に考えていたのですが、プログラミングの重要性をこの研修で認識しました。ディレクターとタスクフォースを兼任していかなければならず、時間配分や、進む方向を見失ったりすれば、その時点ですべてが崩れてしまうので、心してかからねばいけません。

私は、前の職場では臨床実習や小さなセミナーなどを担当しており、多くの学生を相手にした講義なども年にほんの数回程度でした。それがこの4月に本学に赴任して以来、担当分野が変わり、毎週数回の講義を抱え、パニックに陥っていました。ただ、不思議なもので、必要に迫られ、追い込まれると、自分のまわりにある「教育」に関する情報を必死になって集めて考え、工夫するというを自然にや



っていました。その延長線上に今回のFD合宿研修があったわけで、私にとっては「渡りに船」状態でした。それも無料で、送迎、温泉、宴会付きということであれば文句は言えませんでした。教育方法についてのいろいろな疑問点がありましたが、この研修で少しずつ光がみえてきたと思います。特にマス教育の問題点については、それなりの解決方法が見付かってきたのではと感じます。ただ、学生への質問の促し方については、まだ自信が持てません。あ

の数十秒間の「沈黙」が耐えられず、質問はないかと聞きながら自分でべらべらとしゃべっているのが実情です。FDでそのあたりのノウハウをトレーニングする機会があってもよろしいのではないかと思います。

阿部先生を始め、タスクフォースの方々、裏方の方々の御尽力に感謝致します。また、一緒に参加して苦しみを共にした皆さんへもエールをお送りしたいと存じます。

## 宿泊で研修！？

歯学部 塚越 博史

学部長から参加についてのお電話をいただいたとき、正直なところ「これはすごいことだ。わたくしごとに行かせて下さるとは。(あるいは、僕は研修が必要なほど問題教師なのか。)」と驚きました。とはいえ、私自身こうした研修には積極的に参加をしてきたほうなので、数週間後に実施予定の研修をととても楽しみに思いながら受話器を置きました。

今は、参加することができて本当によかったと思っています。2つの主な理由があります。まず、学部間の垣根を取り払った形で教員同士の親睦が深まったことです。研修中も同グループの皆さんと本当に打ち解けて課題に取り組むことができたと思っています。2つ目は、教育学に関する新しい知識を学べたことです。大学院時代に習った教育学では出てこなかったポートフォリオなどの新しい知識を得ることができました。

今後は、同一科目ごとに班を組成して、新しい視点でカリキュラムを作成するなど、さまざまなスタイルの研修があることを期待します。この研修を支えてくださった皆さんに心からねぎらいの言葉をかけさせていただきます。本当にお疲れ様でした。



## 本学で問題となっている具体的テーマを

歯学部 東城庸介

普段お付き合いの少ない他学部の先生たちと共通の作業を通して親交を深めることができ、それなりに有意義な二日間でした。FD合宿の目的の一つは教員の意識改革であり、自分自身の殻に閉じこもって独りよがりになりがちな頭をもう一度解きほぐすことだと思います。教員が改めて自分の教育活動について考える機会を設けることは良いことですが、マンネリ化しないことが重要です。今後は様々な意見を参考に、本学の特性や実情に合ったFD合宿に発展することを期待いたします。単に定式化された教育理念や教育モデルを形式的に学ぶだけではこの合宿

は徐々に形骸化してしまう可能性があります。現在本学で問題になっている具体的なテーマを提起し、本音で語り合う機会を作ってはいかががでしょう。教育のあり方に絶対的なモデルがあるとは思いません。各分野の特異性にも考慮して、具体的に議論すべきだと思います。今回も「ほろ酔いデイベート」を予定していたにもかかわらず、盛り上がりすぎて、実施不能になってしまったのは残念です。最後になりましたが、色々ご指導いただいた阿部先生はじめタスクフォースの先生に心から感謝いたします。

## FD 合宿研修に参加して

薬学部 平藤雅彦



今回、本学が実施した全学的な合宿ワークショップ型 FD 研修に参加する機会がありました。正直言って、薬学部からの参加者として指名を受けたときには、「合宿ワークショップ?」、「FD 研修?」という状態で、しかも土日に行くということで、「今週も雪囲いが出来ないか」というのが本音でした。それは私だけではなかったようで、行きのバス中での自己紹介時には、「ら致」、「洗脳」、「家庭サービスとのダブルブッキング」といった言葉も飛び交い、一体これから何をされるのだろうかといった雰囲気がありました。

この研修では、各学部 1-2 名の 7 名で編成された 5 グループ（我々のグループ名は B 男 B 女）に別れ、5 つのワークショップに取り組みました。各ワークショップでは最初にタスクフォースと呼ばれるスタッフによる課題についてのミニレクチャーがあり、その後課題についてのグループ作業、そして作業内容の発表、全体討論といった一連の作業を分刻みのスケジュールで繰り返すことによって研修が進められて行きました。その課題としては、本学をめぐるニーズとは、カリキュラム設計、学習方略、教育評価、本学を卒業したというアイデンティティをもたせる授業と柔軟なカリキュラム改革体制、というものでした。まさに FD とは教員の教育資質の向上に対する組織的取り組み、研修であり、この研修で学んだような効果的教育の実践には、個々の教員がこれらに対する意識改革と努力が必要であることが認識できました。

ではそれを、大学院学生の研究指導が日常の教育

である自分が置かれている現場にどう活かしていけるかを考えた時に、例えば、セミナー形式、ロールプレイ、PBL (problem-based learning) といった学生参加型授業の重要性は理解できても、教授すべき膨大な基本的知識、160 名前後の学生と限られたスタッフ、その準備のための時間的余裕、点検評価に堪えられる研究業績作り、など現実の制約の前にその実践の難しさを感じざるを得ませんでした。また、部局の異なる教員と肩書きなしで教育について議論することで、本学を医療系総合大学として捉え理解することの重要性を実感しましたが、その一方で、背景・事情が異なるために議論がかみ合わないものを感じたのも事実でした。日本薬学会主催の協議会から先日発表された「薬学教育モデル・コアカリキュラムおよび薬学教育実務実習・卒業実習カリキュラム」を踏まえて、本学薬学部が今後社会のニーズに答えられる薬剤師を養成できる、より具体的なカリキュラム設計ができるよう学部内の教員でこういった機会を持つこともいいことかも知れません。

最後に、この FD 合宿での一番の収穫は、作業の中や「ほろよい懇談会」で、廣重学長や普段お会いすることのない或いはお話をすることのない先生方とお話できたことと思っております。皆様本当にお疲れ様でした。

## タスクフォースとして FD 合宿研修に参加して

歯学部 FD 委員 有末 眞

全学部教員を対象とした FD 合宿研修が行われ、成功裏に終了することができ、これならばもっと早期に実施されるべきであったと思っております。私自身 FD については、資料等から概念としては理解しているつもりでございましたが、タスクフォースの役を命ぜられ、改めて資料を読み返し理解に努めました。消化不十分で合宿に望んだのが実状です。WS1 のグループ作業では少々アドバイスをさせていただきましたが、その後は各グループとも精神的に作業に取り組み、我々の出番は殆どなく、なか

には、私よりタスクフォースが適任と思われる方が何人もおられ、逆に力を与えられたように感じております。また当初作業グループの構成が各学部にまたがるため統一性がとれるかという危惧もありましたが、全くの杞憂に終わり、同じ作業を通してむしろ新たな仲間意識が生まれ、活発な議論がなされた事に大変感銘を受けました。また作業、発表をつぶさに見学する機会を与えられ、作業には参加してはおりませんが大変勉強させられました。

# 学部の壁をこえた連帯意識

F D委員会委員長 阿部和厚

4月にこの大学にきてから懸案となっていたFD合宿を無事に終え、当初の目的をほぼ達成して安堵しています。そして、この大学に、共同作業により高きを目指すことができる高邁な連帯意識の人物が少なくなっていくことを知ったことが最大の収穫でした。

皆さんの意見を全部聞こうというところから始めました。実際に合宿をすることへの抵抗も聞こえてきました。いまさら学ぶことはないという陰の声ともれました。だか、これまでの経験から、抵抗はバネとなることを知っています。立ち上がりはスローでしたが、いざ本番で強力な事務の支援、見事に演じて頂いたタスクフォース、そして今まで行ってきた多くの大学の研修にくらべてもひけをとらない参加者の熱心な作業ぶり。学長も廣重さんとただの人になっていただいて始めたグループ作業をみて、これはなかなかやるなあと嬉しくなっていました。

このワークショップは、医学振興財団で長年継続してきたスタイルを全学にも受け入れられるように私なりにアレンジしたものです。文系もふくめた多くの学部をもつ総合大学では、アメリカの略語を用いるだけで、拒絶反応がでます。いずれにせよ、国際的なスタンダードとなっている教育の基本を知ることは、日本の大学教育が国際基準で発展する第一歩です。しかし、実は、この研修では、この大学の教育の問題を大きく取り上げました。

今、教育はその大学の生き残りがかかっている商品です。だから、大学の評価もまず、その大学の成り立

ちをあらゆる理念を基準に何が特徴ある教育か、教育でどんなことが自慢できますかと様々な証拠を探ります。そしてこれらが、北海道医療大学でどれほど意識され、具体的に改革をすすめてきたが問われます。このレベルで、学部のレベルで完結していて、このような研修は必要ないととられているのかもしれませんが、いま大学総体の在り方が問われています。

この研修にはつぎのような意図をもちこみました。

1) 最初のブレンスイトーミングで、この大学の自慢できるもの、売りを沢山あげよう：この大学の教育で自慢できることがどのくらい出てくるのだろう。すぐ思いつく自慢は何だろう。この大学という意識は？

2) WS1では、この大学の教育へのニーズをどのように考えているか？ どうしなければならないのか？ この大学はどんな大学か？ 教育理念を具体的にアピールできているか？ 学生、地域、日本にこの大学の存在をいかにアピールできるのか？

3) 私学として、専門教育を大きく左右するという導入教育はどうなっているか？

4) 様々な分野、学部をこえた教育連携はできているのか？ どうしなければいけないのか？

5) チーム医療を学んでもらう立場で、学部や分野間、教員同士のコミュニケーションがとられ、うまく連携された授業がなされているか？

6) 入学から卒業までの学生の成長、学習課程にあわせ、そして大学院へむけて、横の連携、縦の順次性

が考慮されたカリキュラム設計がなされているか？

7) これらを意識して、この大学の個性となるような授業を提案してほしい。この大学で学んでよかったといえるような授業を提案してほしい。

おりしも教育のCOEにあたる「特色ある大学教育支援プログラム」が募集されよとしています。これは他大学にも参考になるような特色ある教育を支援しようというものです。大学教育の方法、プログラムとして一般に参考にしてもらえる、モデルと



なるものは何ですか？これまで、このことがどれほど意識されてきましたか？本校の売りとなる教育がどれほど意識され、実施されてきましたか？今回のFDは、教育をアピールできるようにしていく一歩であり、成果を一歩でも現実のものとする必要があるでしょう。ワークショップの最後に、「柔軟なカリキュラム改革体制」を考えようとしたのもこのことを意識したからです。

この研修の評価をみて、学部をこえた連携意識を形成するという大目的は成功とみてよいでしょう。さらにこのような研修をつづけることにも多くが賛同しています。

各グループ作業の時間が足りないという問題は、最初にかなりはっきりと説明しておかないと、かならず指摘されます。ほとんど同じ流れを、ある大学では9時から5時までの1日、またある大学では、午前には講演をし、バスで移動して、宿泊先で午後から始め、翌日の昼までで、こなしことがあります。タスクフォ

ースの周到な準備と、リーダーが時間どおりにすすめるように、先を読んだ支援をします。短いかと危惧していても、時間には集まるので感心しました。また、90分授業でも説明、グループ作業、発表行っています。これにより適宜にいった休憩時間も生きてきます。

ですが、最初としては上出来でした。とくに、各グループの熱意が作業を追うごとにエスカレートしていったのが見事でした。そして、わが大学で特色ある教育として発展させていけるような提案がいくつもだされました。

教育には、学部独自の問題もあるでしょう。このFDのタスクフォースマニュアルはそのために、すべてオープンにしてあります。学部の問題を多くの人で討論、改善していくことも期待されます。情報の共有によるオープンな大学運営が、近代的発展の力になります。

## 特色ある教育プログラムは何か？

文部科学省は、平成15年度から特色ある教育改善、充実に取り組む国公立大学のうち、とくに特色ある優れたものを選定し、これを公開して他大学の改革に参考にしようとしている。これには100校を選出し、予算の優先配分を行うという。研究費を重点配分する「21世紀COEプログラム」の教育版といわれる。ここでは多様な人材の養成、国際競争力を視野に入れた教育を質が問われている。日本の高等教育の質と量大きく担う私立大学こそ教育を特色が明確になっていかなければならない。

北海道医療大学における特色ある教育プログラムは何か？これらは、システムに取り込まれ、大学として

強く意識され、重点的に推進されている必要があろう。そしてその前に、各教員が担当する授業が、この大学の使命を達成すべく創意工夫されている必要があろう。さらに、教育はカリキュラムに集約される。これが毎年改善されて、よりよい教育プログラムが実現されていける体制、これらがわかりやすい形で学外に周知されていくこと、大学としてアピールしていくためには全学的視点、学部を超えた教育連携が重要である。

FD委員会では、この大学でどのような特色ある授業が行われているか調査し、学内で公開することも検討する。

### 編集後記

新FD体制となってFD広報から見直すことになった。よみやすく、身近なこと、大学をよくするためにひとりひとりが大事、顔がみえる主張ということで顔写真入りのニュースとなった。今年は、冷夏だった。何といっても11月の合宿研修が気がかりだった。多少の抵抗を、大きな前進のバネにしたい。こちらの新しい学部では、顔を合わせると、教育改善、将来構想の話となっている。あつい思いの夏。はりきりすぎず、みのり多い着実な前進に期待したい！（いさお）

発行日 2002年12月27日

発行元 北海道医療大学FD委員会

編集委員 阿部和厚、阿保順子、有末 眞、太田 勲、川上智史、○黒澤隆夫、鈴木幸雄、高橋 大、土肥聡明、東城庸介、○和田啓爾、西 基、飛岡範至 （○発行担当）